

セミナーを終えて：「女性と経済学」から見えてくるもの

生垣 琴絵

1. はじめに

本セミナーの機会を得て、初めてお茶の水女子大学に足を踏み入れ、さらに、上村協子氏の所蔵する松平友子の「13冊の資料」を拝見できたことは貴重な体験であった。そこで手書きの図や書き込みのある資料、そして、それらが今日まで脈々と受け継がれてきた様子を目の当たりにし、この系譜を経済学の系譜に位置づける必要性を改めて感じられたことが、漠然とした思いとしてはあるが大きな収穫であった。

今回の私の報告では、『日本における女性と経済学』の第1部「女性への経済教育」の観点とその教育が目指した2つの女性像（「職業婦人」、「新しい良妻賢母」）を示しつつ解説をした。さらに、森本の「消費経済学」は、消費という共通項を媒介とした経済学と家政学の接点にある研究・教育であり、それは、その後の生活と経済との結びつきに着目した生活経済学へと結びつくものであること、そして、2つの「新しい女性像」への道は、既存の経済学に取り入れられてこなかった観点や論点、無視された事柄に光をあてる「新しい経済学」への扉を開くきっかけとなったことが焦点であった。

その後のコメント、および、ディスカッションにおいては多くの示唆を得ることができた。反面、コメントへのリプライが十分にできなかったと感じている。したがって、可能な範囲でそれを補うべく以下に記してみたい。

2. コメントへのリプライと考察

足立眞理子氏からは、経済学史もしくは経済思想史に、家事経済学（松平友子）、家庭経済学（伊藤秋子）、生活者の経済学（御船美智子）を位置付けようとした点を特徴として挙げていただいたことと同時に、女性が担った経済学の「経済学批判」としての側面についてコメントを得られた点がとても大きかったと感じている。とりわけ、「女性が担った経済学の意義」は、一番最初から実質所得（消費）に注目していたことにあり、「家計というブラックボックスの中身の可視化」を目論むこの姿勢は、経済学批判としての展開であるということが示された。この「女性が担った経済学」が最初から「消費」に注目していたこと（その傾向が強かったこと）は、20世紀初頭のアメリカの経済学界においてもほぼ同じことが言える。拙稿「アメリカにおける消費経済学の形成——ホーム・エコノミクスと「賢明な消費」の経済学——」¹では、アメリカのホーム・エコノミクス分野の生成と、その創成期および発展段階において活躍した女性経済学者たちが消費経済学を展開していたことを示した²。とりわけ、シカゴ大学で活躍したヘーゼル・カーク（Hazel Kyrk）を取り上げたが、彼女は、経済学の学位を取得し、著名な論文コンテストで受賞するなどの実績があるにもかかわらず、大学教員の職を得るまでに時間がかかったというエピソードがあった³。その理由は、大学教員として「男性」スタッ

1 博士学位論文（北海道大学、2012年3月）

2 原伸子氏の『ジェンダーの政治経済学 福祉国家・市場・家族』（有斐閣、2016年）においても、同観点をさらに発展させ、ゲーリー・ベッカーらによる「新家庭経済学」そして、フェミニスト経済学との関連を示している。

3 前出拙稿53頁。

フを望む風潮があったことにあるようで、ようやく得られたシカゴ大学の職は、当時の学界では経済学の専門家とはみなされない「ホーム・エコノミクス学部」のスタッフであったという。その後、彼女は、正式に経済学部のスタッフになった後も、両学部にも所属し続け、ホーム・エコノミクスの発展にも寄与した功績がある。アメリカにおいても、経済学とホーム・エコノミクスという二つの領域の接点に女性の経済学者がいたのである。

以上のような潮流も見られることから、日本だけでなく、そして、「女性と経済学」のつながりに限らない、この分野の学術的な意義と位置を明らかにする必要があると考えている。その際、消費経済学、家庭経済学、家政学、ホーム・エコノミクス（アメリカの家政学）など、各名称が意味するところ、そして、その内容の差異などにも注目をしながら進めていく必要があるだろう。

さらに足立氏からは、「女性と経済学」の未来への展望として、「経済学の一分野／経済学批判か」、「新たな経済学の生成か」いうこと、そして、「生活者の経済学（あるいは生活経済論）とフェミニスト経済学の協同は端緒についたばかり」であることが示されたことにより、生活者の経済学やフェミニスト経済学を経済学史（経済思想史）にどう位置付けるか、という大きな問題が残されたままであることがより鮮明になったと考えている。

金野氏からのコメントにおける「社会の経済学化」という言葉で示されている事柄は、きちんとリプライをするべきであった。金野氏のコメントにおいては、「経済学」の合理性や効率性の追求という側面のみが「経済学」であるかのように限定的に語られており、その思考の普及をもって「経済学化」と述べている印象がある。仮に、そのような「経済学」を生活世界に持ち込むことを「経済学化」と呼ぶのだとして、それは、森本においても新渡戸においても、女子経済学教育を進めるにあたっては、むしろ、積極的に受け入れられる事柄だったはずである。当時の彼らにとって、日本の国民に欠けていると感じられた知識であり思考方法だったからこそ、経済学教育の必要性を唱えたのであるから。

さらに、金野氏は、「松平が『倫理的、道徳的な生活』と言うとき、それが経済合理性——それがどう理解されるのであれ——にかなった生活という意味だとすれば、松平がそう主張した意味を、私たちはどう受け止めればよいのだろうか」とコメントしている。ここで松平にとっての「倫理的、道徳的」であるとはどのようなことかという疑問が浮かぶのではあるが、少なくとも森本や新渡戸にとっては、経済合理性を追求する思考と「倫理的、道徳的な生活」は矛盾するものではないと捉えられていたと私は考える。そもそも、森本が目指したのは、日本という国家の経済発展であった。彼は、アメリカの経済発展の理由の1つは、「婦人の経済能力が発達したために家庭生活の消費が合理化され、時間と労力に著しい余裕を来し、婦人がどしどし積極的方面にまで活動するようになった」ことを挙げ、それを賞賛したのである。そして、日本の女性に欧米の女性が受けている経済教育を行なうことによって女性自らが時間と労力の節約を図り、余裕をつくり、その余裕を利用して生産に参加できるようになることで、日本社会全体の生産効率が上がると彼は考えた。要するに、女性の社会進出が増えるような社会、女性の消費行動が目先のことだけではなく広く社会的な目を持ったものになることが必要だということである。このような考えを普及させ、実践していこうというとき、経済学教育という方法をとっただけなのではないか。森本や新渡戸にとって、経済学の知識が（一般的な意味での）倫理的であることや道徳的であること矛盾するようなものであるならば、決してそんな方法はとら

ないはずではないだろうか。

金野氏は「社会の経済学化」について、コメントペーパーの「3.『女性解放』の理念が果たした役割」においても触れている。しかし、この箇所でも語られている「社会の経済学化」は、前の「2. 社会の『経済学化』」とは、意味が異なっている印象を受ける。それは、単に「経済合理性を生活（社会）に普及させる」ことを語っていた箇所での意味合いを遥かに飛び越え、あたかも、経済学的な思考（または経済合理性）にとらわれ、その範疇でしか考えない、語れないというように、人間の行動が規定されてしまっているかのように「社会の経済学化」を描いているように受け取れる。そして、「女性と経済学」における一連の動きもそれを側面支援した、つまり、問題点を浮き彫りにしたことで逆にそこにのみ注力するような行動へ導いてしまうという意味での視野狭窄状態を引き起こしたのだ、と描いているように。

これについては、これ以上ここで論じるのは不適切だろう。なぜならば、少なくとも私にとって、2節での「社会の経済学化」はさておき、3節における「社会」や「経済学」の意味が、明確ではないからである。また、仮に、経済学的な思考をもつ視野の狭い人間ばかりの社会が今ここにあるのだとしても、それに対し「女性と経済学」の一連の動きがそれを促してきたかどうか、丁寧な検証が必要であろう。そして、金野氏のコメント3節冒頭「経済学的世界観の普及過程」という言葉も「社会の経済学化」と同じような意味合いと取れるし、「経済至上主義」という言葉も見られる。これらは同じことを意味する言葉として並列しうるかについても、断言できない。ここでは、ディスカッションにおいて「社会の経済学化」の意味をもっと議論すべきだったという後悔の念をもって、結びとしたい。

3. おわりに

論点提供というかたちで語られた伍賀借子氏による竹中恵美子氏との経験に基づく、生の、力のあるお話は、心に響くものであった。労働運動の切実さやそこに掛ける思いを実現していくために竹中氏が大きな力を与え続けていたこと、それをもとにさまざまな問題を乗り越えて確固たる歴史がつくられた、そのことがひしひしと伝わった時間であった。

私にとっては、「女性と経済学」というテーマに関わることで、それまで関わりをもつことを思ってもみなかった方々となつながら、協働をする機会を得ることができた。今回のセミナーもその一つである。今後もまたここでできたつながりが新たな日々を積み重ねていく力となっていこう。企画・運営の方々、および参加された全ての方々に感謝したい。